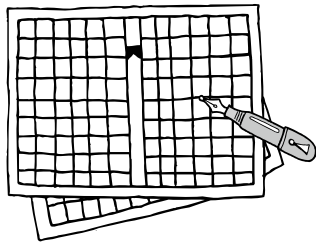


ふるさと秋田文学賞



目次

● 最優秀作品

小説 『竿燈万華鏡』	児玉ヒサト	5
「最優秀賞」受賞者のことば	・・・・・・・・・・・・・・・・	52

● 優秀作品

小説 『焼畑の子』	山北登	55
「優秀賞」受賞者のことば	・・・・・・・・・・・・・・・・	106

● 選
評

「秋田」は面白いテーマ

内館 牧子

・
・
・
・
・

110

小説創作の筋力を

塩野 米松

・
・
・
・
・

114

小説は短いほど難しい

西木 正明

・
・
・
・
・

118

ふるさと秋田文学賞最優秀作品

竿燈万華鏡

児玉
ヒサト・作

竿
燈
万
華
鏡



(一) 缶ピース伝説

七月の大町界限は騒がしい。

八月三日開幕の秋田竿燈まつりに向けて様々な準備が始まる。

竹竿や提灯の支度。地元竿燈会の詰所となる小さな神社や集会所の掃除やら飾り付けやら。そして、差し手や囃子方は妙技会のスケジュールから逆算して計画的に練習を始める。

笛や太鼓の音に一段と熱がこもる頃になると、近所の住民はいてもたってもいられない。

「また今年も、この騒々しい時節が巡ってきたのか……」

どの人もそんなふうによやきながら、家の中から小路に出てきて、毎夕、子どもたちや若衆の練習を見守る。中には交通整理を買って出るステテコ姿のおじさんもいたりする。

長老は、いつも十九時半に現れた。

折りたたみの椅子を抱えて家の前に出てくる。ガチャッと広げ、無造作に置いた椅子にどっかりと腰を下ろすとラガービールを開ける。竿燈の練習風景と長老の晩酌風景。それは夏の風物詩でもあった。

「明治の頃のねぶり流しは、それはそれは見事なもんだった……」

中学の頃からちよくちよく聞かされていた、長老の口癖だった。この言葉が出ると、周囲の大人たちは「また始まった」と苦笑いを浮かべたものだ。

「お爺さん、明治の竿燈、見たことあるの？」

町内最長老とはいえ彼は明治生まれではない。それを知ってのうえで、僕らは尋ねる。これまたお決まりの、将棋や囲碁で言うところの『定石』のような会話だった。

「おらあ大正六年の生まれだ。あるわけがねえ」

「せば、なして解るの」

「それだばおめえ、祖父の代・親父の代から語り継がれている伝説つてもんがあるなや」

長老は、コホンとひとつ咳をすると、決まっつていつも傍らに置いてあるピースの缶を開けた。

「とりわけ明治十九年のねぶり流しはな……」

取り出した一本を、白い無精髭の口元にくわえて、百円ライターで火をつける。たちまち缶ピース独特の芳香があたりに広がる。

夕暮れが夕闇へと変わる。

濃紺の空に、長老の吐き出す煙が溶けてゆく。

僕ら中若は一足先に練習を切り上げ大若に練習場所を渡し、長老を囲んで車座になった。

ごくりと喉を鳴らしてビールを一口、そして長老は語り始めるのだった。

——昔はな、今のよう三日も四日も竿燈を上げたりはしねえ。竿燈すなわち『ねぶり流し』とは、一年にたった一度、秋田の七夕の夜に訪れる夢か幻のようなものであったのよ。

町には今ほど電気は普及していねえ。信号も街灯もネオンもねえ。夜というものは、本来、閑散として暗いものだ。

その暗闇に、竿燈が揺れる。

想像してみれ。それだけでも美しいだろう。

七夕の夜、町内の人たちが三々五々、通りに集まってくる。浴衣を着て、小さい提灯を提げて、子どもの手を引き、あるいは肩車をして。

家々の軒には七夕飾り。見上げれば、満天の星空だ。

と、暗闇から、突然、太鼓が鳴り響いてくる。

ドドン・ドン・ドドドン……。

囃子の音に乗って、若衆たちがお出ました。肩に竿燈を担いで、通りに入ってくる。

その凛々しい姿に、見物の女たちの目は釘づけだ。

当時、竿燈の差し手はみな町内の長男たちに限られていた。竿燈の夜は、嫁とりに繋がる絶好の機会でもあったわけだ。

次男坊・三男坊は囃子方にまわる。

差し手という花形は憧れでしかないが、彼らもまた互いに腕を競い合い技を磨いていく。そうして生まれた笛の名手・太鼓の名手というものは差し手にも負けぬほどに尊敬されたもんだ。

掛け声とともに竿燈は立ち上がる。

漆黒の闇に浮かび上がる、ほのかな橙色の稲穂だ。

差し手も囃子方も、町のみんなも、一年間待ち焦がれていた瞬間だ。

そんなねぶり流しに、危機が訪れる。

明治十九年四月三十日。春の強い風が吹いていた。

夜遅く、川反四丁目の住宅街の一角で、小さな火が起こる。のちに『俵屋火事』と

呼ばれる大火の火種だ。

折からの強風に煽られて、火は燃え広がる。川反から茶町、肴町、寺町、米町……。かつての久保田藩城下の外町（とまち）はあつという間に火の海だ。

火の勢いは強く、消防組は手も足も出せない。火は、まる一晚かけて、八橋（やばせ）村から寺内村にまで及んでいくことになる。

それより一昔半ほど前に遡って思い返せば、戊申の頃の頃はかろうじて戦火を免れた秋田の町だ。それが不運な火事で、一瞬にして焼野原になってしまった。

この大火で失われたものは多い。

例えばな。

このおれの先祖がどこからやってきて、この秋田におれが存在するに至ったかという手掛かりだ。寺町にあった菩提寺が焼け、過去帳が失われてしまった。

一個人の歴史・一族の歴史、企業の歴史も町の歴史も貴重な文化財も、多くが灰になったのだ。

他ならぬ竿燈もだ。

多くの町内が、竿や提灯、笛・太鼓、竿燈に必要なありとあらゆる物を一晩で失った。

二日ほどが経って、ようやく火が鎮まった黒こげの焼野原に、一人の若者が立ち尽くしていた。春先に祝言を挙げたばかりの提灯職人の寛治郎だ。

身重の女房と二人、着の身着のまま夢中で逃げた。命からがら、土崎湊にある知り合いの家を寄せたのだが、火が収まったと聞いてすぐに寛治郎は提灯屋の工房のある川反に戻ってきたのだった。

しかし、言うまでもない。提灯屋は跡形もない。七夕の夜、竿燈を上げる。そのためにこつこつと作っていた提灯も、材料も道具も、全部、失われてしまった。

途方に暮れる提灯屋の背中を、ぽんと叩くやつがいた。鳶の若者で、竿燈の仲間だ。彼もまた、足場を組むのに使う竿竹……つまりは竿燈の竿だな……それを、一本残らず灰にされてしまったのだった。

二人は、ともあれ生きて再会したことを喜び合った。そして、約束する。たった一本でもいい。おれたち二人だけでもいい。七夕の夜、竿燈を上げよう、とな。

寛治郎は、もと工房のあつた場所に粗末ながらも掘立小屋を建てた。東奔西走して、提灯の骨組みにする竹や和紙、和紙に塗る油、材料をかき集めた。ずいぶんと金も借りたに違いない。鳶もまた、必死で竹竿を調達しに走り回った。七夕まで、わずかふた月あまりだ。

火事で焼け出された多くの人々は、まずは生きること・元通りの生活を取り戻すことに必死だ。なにしろ三千五百戸が焼けて無くなった。当時の秋田の町の家々の約半分だ。なんとか火を免れた寺や学校が避難所になって、人々はそこで炊き出しを受けたりしていた。とても竿燈どころではない。二人に向けられた眼差しは冷ややかだった。

提灯屋が朝起きると、掘立小屋のまん前に、馬車馬が落としていった糞が山のように積まれていたり、夜中には壁に向かって酔っ払いが立ち小便をしていたり、嫌が

らせが絶え間なかった。

それでも寛治郎は、黙々と提灯を作り続けた。客もちらほらと訪れて、注文が舞い込むようになる。寝る間がないほど寛治郎は忙しくなった。

そんな寛治郎の元に、竿燈仲間が一人・二人と戻ってくる。「笛だけ持って逃げた」と言って、一人の笛吹きが、懐から笛を取り出してみせた。これに寛治郎は勇気づけられた。

仲間たちは、寛治郎の提灯作りを手伝いながら夜な夜な集まっては語り合った。

「太鼓は焼けてしまっ一つもないぞ。なんとする」

「なあに。こうなったら戸板でもなんでも叩いてやるさ」

そこへ、鳶の若者が荷車を曳いてやってきた。

「手頃な竿が揃った。みんな、組み上げるのを手伝ってけれ」

七夕前夜、一本の竿燈の準備が整った。残念ながら、太鼓の調達だけはとうとうかなわず、寛治郎の掘立小屋から戸板を外して叩くことになった。冗談が本当になって

しまった。

七夕の夜がきた。

町の人々は半信半疑だった。「竿燈なんて、できるわけがねえ」、「今年は、ねぶり流しは無理だろう」、多くの人がそう思っていた。

日が落ちて、あたりは夕闇に包まれた。

すると、どこからともなく、流しの笛の音が聞こえてきた。太鼓は、聞きなれない風変わりな音ではあったが、紛れもなく竿燈の囃子だった。

人々が、集まってきた。

寛治郎と鳶職人は提灯の蠟燭に火を灯した。囃子が流しからいよいよ本囃子に変わる。

まっすぐに、一本の竿燈が立ち上がった。透き通るように真新しい提灯の中で蠟燭の火が揺れている。

それを見て、人々は寛治郎たちの思いを知る。これは火事で死んだ人たちへの弔い

の竿燈なのだ……とな。

寛治郎が高く持ち上げた竿燈の竿に、鳶職人が竹を継いで更に高くする。天まで届けとばかりに、再び寛二郎が三本目の竹を継ぐ。その手際の見事さに拍手が起こると、その時だった。人垣の中で、にわかになわめきが起こる。

「おい！ あれを見れ」

なんと、竿燈を上げているのは寛治郎たちだけではなかった。隣の町、その隣の町、そのまた隣の町、あちこちで竿燈が揺れているのが見える。

ふた月前、大火で秋田の町は焼野原になった。視界を遮るものの何一つない広大な更地で、人々はいそいそ見たことのない、そして今後二度と見ることできない、竿燈の光景を見ていたのだ。

風にのって囃子の音が響き合う。

隣町に負けてなるものか。

差し手は我を忘れて、ありったけの力をふりしぼる。

町の人々も、腹の底から声を限りに叫ぶ。子どもも、年寄りも。

ドッコイシヨ・ドッコイシヨ

オイッタサー・オイッタサ

根っこついだア・オイッタサ……。

七夕の夜も更けて、蠟燭を使い果たし、「また来年、もつと見事なねぶり流しをお見せする」と人々に挨拶して、寛治郎たちの祭りは終わった。

わずかな酒を持ち寄って、ささやかな宴が始まった。

宴の席で初めて、鳶職人が火事で母を失ったことを仲間たちに打ち明ける。身内に不幸があった者は、その年、竿燈を差すことはできない。鳶職人は、しきたりに背いたこと、これまで黙っていたことを皆に詫びた。寛治郎が言った。

「もう、みんな知ってるよ」

仲間たちは皆、幼なじみだ。言葉には出さずとも、互いの気持ちは手に取るようにわかっていたのだろう。

「今宵のねぶり流しは、忘れてはならねえ」

明くる朝まで、みなおおいに語り合い、おおいに泣いたそうだ。――

長老の十三回忌の法要は賑やかだった。

「爺さんのあの話は、どこまでが本当でどこまでが作り話だったのかね」

「さあねえ、伝説だからねえ」

梅雨のまだ明けぬ空はどんよりと鈍色だったが、長老の墓前に線香と一緒に火のついた一本の缶ピースが手向けられると、俄かにそこだけ、夏の風が吹いた。

(二) イチゴ味の雨

竿燈まつりは、しばしば雨に襲われる。それも、けっこうな土砂降りだったりする。その年の、その夜の竿燈も、何の前ぶれもなくバケツをひっくり返したような……いや、頭の上で、今はない八橋の市営プールがひっくり返されたような雨が襲いかかってきた。

ちょうどその時、私と彼女は山王十字路のあたり。遠目に竿燈の群れが揺れるのを眺めていたのだけれど、もう、たまらず、走り出すしかなかった。

「市役所まで走るぞ！」

「うん！」

それは最初のデートだった。

背中あたりで、「今夜はこれで終わりにします」というアナウンスが、声まで雨に濡れたように悲しげだった。

全速力で走りながら、大通りを逃げ惑う秋田市民や観光客を横目で見る。なんだか、子どもの頃に観た、ゴジラやガメラの映画のワンシーンを観ているようだった。

ずぶ濡れて、やっとの思いで雨宿りのできる市役所の庁舎に辿り着いた。

手に持っていた紙コップの生ビールは、もはや雨水以外の何物でもなく、彼女の手にあったかき氷はかすかにイチゴシロップの色をとどめた雨水……以外の何物でもなかった。

最近ショートにしたばかりの彼女の髪から水滴がしたたり落ちる。ノーブラでアパートの部屋から出てきたのだろう、黄色いTシャツが肌にぴったりとへばりついて、あまりにも無防備に、彼女の胸の形が露わだった。

「やだ！」

彼女は恥ずかしそうに胸元を手で覆った。

人波が一瞬途絶えた。

私と彼女は唇を重ねた。イチゴ味が甘く香った。

その夜から四度目の竿燈まつりが巡ってくる頃、私も彼女も自覚しはじめていた。

二人の關係が、どうやら末期の症状に侵されて、どうしようもないことを。

どちらからともなく、言葉の隙間に別れのイメージを忍ばせながら、途切れ途切れの会話を床に落として、ひとつひとつ指先で拾い合う。二人とも、疲れ果てていた。

ある夜、彼女が、ほがらかに笑って言った。

「竿燈まつりで、別れよう」

あたしたち、ほら、最初のデートが竿燈の夜だったよね。最後のデートも、竿燈の夜にしよう。なんだかさ、竿燈、トラウマになりそうだよね。

あははは。

あははは。

あははは。

一本・二本・三本、やわらかい棘が胸に刺さった。

別れの夜は、竿燈の最終日だった。

市役所前の山王大通りは歩行者天国。交差点にはパトカーが一台停まっている。そ

の脇に立つお巡りさんが、怪訝な顔で私を見る。彼女が、人目もはばからず泣いているのだ。

「お・おい、泣くなよ……」

「泣いてなんかない」

「泣いてるじゃないかよ」

「雨降ってきたんだもん」

火照ったアスファルトに大粒の雨が雫の跡を叩きつけはじめた。

浴衣を着た彼女は、速く走ることができない。一本だけ持っていた傘を差したが、雨脚は強い。竿燈の演技が始まる前だというのに雨宿りだ。

市役所の屋根の下で、何の会話もなく、辺りを漂う夕立の匂いを嗅いでいた。意を決したように彼女がつぶやく。

「今まで、ありがとう。さよなら」

彼女の頬を、雨の跡とも涙の跡ともつかぬ水滴が無数に覆っていた。

「お・おう……」

雨が少し小降りになったのを見て、私は傘を彼女に手渡してその場を離れた。

振り向いたら、きつと何も終わらない。

そしたら、私も彼女も、何も始まらない。私は逃げるようにして雨に消えた。いや、たぶん、逃げたのだ。彼女の中にあつた、彼女の未来の、青い設計図から逃げ出したのだ。

背中のあたりに、それまで途切れていた竿燈のお囃子が追いつがるように響いてくる。

これまで感じたことのない、何か、とても熱くて、どろっとしたものが喉の奥にあつて、私は激しく咳込みながら走っていたのだった。

また土砂降りだ。

私は、三歳になったばかりのアヤを抱きかかえて走る。

「アヤちゃん、走るぞ！」

「じいじ！ ガンバレ」

無数の秋田市民・無数の観光客たちと一緒に必死に走って、市役所の庁舎に辿り着く。息が切れる。

「じいじ、はい、どうぞ」

アヤが手に持っていたカップのかき氷は、いくらか原型を留めている。

「じいじに、くれるのかい？」

「うん」

イチゴ味のかき氷が喉を過ぎてゆく。一瞬にして、四十年近くも前の、あの竿燈の夜が甦った。

大通りを後にして家に着くと、娘の歩美がバスタオルを持って待ち構えていた。

「おかえり。ひどい雨だったよね。濡れたでしょ」

幸い、アヤの機嫌は悪くなかった。

「ママ、あのね、じいじがアヤちゃんを抱っこして走ったの。『うっほ・うっほ』って。オモシロかった」

「あら、そう。じいじ、頑張ったんだ」

アヤが風邪をひいたりしないようにと、二人はすぐにお風呂、ということになった。私は、仏壇に線香をあげた。

写真立ての中で、彼女が笑っている。

一人でビールを飲んでいると、風呂から上がった歩美が、「わたしにも」と言っ
てグラスを差し出した。

「アヤは？」

「寝ちゃった。竿燈、相当楽しかったみたいだよ。『じいじが、じいじが』って、ず
っと言ってたよ」

「そうか」

歩美は美味そうにビールを飲み干した。

「んー……。もう一杯」

「お前な……」

呆れる私を横目に、今度は手酌だ。

「ね、とうさん。以前、かあさんから聞いたことあるんだけどさ」

「ん？」

「とうさんとかあさん、別れてた時期があったって……」

彼女、そんな話を歩美に聞かせていたのか。

「結婚する、前の話さ」

さっきまで絶え間なく屋根を叩いていた雨音が止んで、遠くから竿燈の囃子が聞こえてきた。

「どうして、かあさんと別れたの？」

「どうして、かあさんとまた一緒になろうって思ったの？」

さて……。どうだったか……。

理由やら、事情やらといったものは、イチゴ味の雨にことごとく流されてしまつてもはや跡形もない。

地元の町内へと戻つてゆく竿燈の囃子が近づいて、家の前を通りかかった。

「竿燈の夜に、雨が降つたからだよ」

そして、遠ざかつて、囃子の音が消えていく。間もなく短い夏は終わる。そんな氣配に、黙つて耳を澄ませていた。

(三) 拙者はウミネコ

あなたがた人間には見えますまい。あのお二人の姿。

無理もない。お二人とも、すでにこの世の人ではないのだから。

ここは秋田市、千秋公園・中土橋のたもと。お堀の水面に咲き誇る蓮の花々に向かい、一心に絵筆を走らせておられるあのお方。久保田藩第八代藩主・佐竹義敦公にあらせられる。またの名を曙山。天才的な画人と謳われた希有なお殿さまである。

その後ろ、ほら、釣竿を担いで、殿の方へ近づいていくあの姿は、殿が唯一、心を許されたと言っても過言ではない小田野直武どの。

直武どのは、そもそも一介の藩士に過ぎなかった。しかし、その名を江戸表にまで轟かせるほどに、稀に見る絵師であった。その才能に惚れ込んだ殿が、突然、直武どのに弟子入りをご志願された。あれには、城じゅうが度肝を抜かされたものだ。

平成と呼ばれる世になってもなお、世に名高い秋田蘭画の二大巨匠はあのように、ときどき城下にお出ましになり、思い思いにお過ごしになっておられる。

え？　かく申す拙者が何者かとお尋ねか？

名乗るほどの者ではござらぬ。

ただの、一羽のウミネコにて候。

まあ、左様なことはどうでもよろしい。

お二人の会話を立ち聞きするは拙者の第二の楽しみ。しばしの間、ご静肅に願います存ずる。

「おう、直武か。健吾であったか」

「おそれながら、久しく死人でござりますれば……健吾かどうかは……」

「はははは。こやつめ……」

「おお！ 殿、お見事な写生のお手前にござります……この蓮の花びらの質感といい、この陰影の表し方といい……」

「世辞は無用じゃ」

「世辞などは、めっそうもないこと……」

「直武、そちは、描かぬのか。いったい、何じゃその釣竿は」

「は。なんでもこのお堀に、『外来種』なる得体の知れぬ魚が棲みついている由、聞

き及びましてござります」

「『外来種』……?」

「是非ともこの目で見てみたいものと思ひまして」

「そうか。うむ。それは興味深い。必ず釣り上げて見せよ」

「ははっ」

やれやれ。

もう小一時間、お二人は黙々とご自分の興味と向き合っておられる。退屈なことこの上もない。直武どのの釣り竿にいたっては、まったく、ぴくりとも動かぬ。

「直武、どうした。釣れぬのか」

「面目次第もござりませぬ。うんともすんとも……。もののはしくれがボウズとは、情けのうござりまする」

むふっ。直武どのは、実にうまいことを申される。

「ところで直武、今日は城下がいつになく騒がしいのう。何ゆえじゃ」

「は。本日八月三日より四日四晩にわたりまして、秋田竿燈まつりにござりまする」

「そうか。ねぶり流しであったか」

「殿、今宵あたり、竿燈大通りまでお出かけになられてはいかがかと」

「んー……。わしは人ごみは好かぬ」

「左様で……」

拙者の記憶が確かであれば、竿燈の起源は宝暦の年間。だとすれば、殿はおそらく、創生期の竿燈をご覧になっていたのではあるまいか。

「わしが城から見えていたねぶり流しとは、あまりに違うでの……」

なるほど。なんとなく殿のお気持ち、わからぬでもない。思い出というものは、元のかたちのまま、胸の奥に仕舞っておくのが美しきものであるからして。

「ところで、直武、最近、気になることがあるのじゃが……」

余計なことかもわからぬが、今日の殿さまは「ところで」が多いようである。

「は。何事にござりましょう」

「城下に、このところめつきり子どもの姿が少ない。何ゆえじゃ」

あ、そう言われてみれば、確かにそのような気が……。

「なにやら『少子化』などと、城下では申すようにござりまする」

「『少子化』とな……」

「すなわち、子を生す男女これ少なく、代わりに老人ばかりが増える由……」

「それでは、早晚、秋田の城下に人がいなくなるではないか！」

「御意」

「なんとたることじゃ！ 子を生す男女が少なしとは、まったく腑に落ちぬ。四日四晩
竿燈に興ずる気力精力があるならば、ただちに子づくりに励むべしと城下に伝えよ。

即刻、触れを出せ！」

「と・殿……、そう仰せになられましても……」

日頃、温厚な義敦公が、なにやらご立腹の様子。

「ところで、直武」

え？ また？ で、ござるか？

「さつきから、ズー——つと気になっておるのじゃが」

「は。何事でござりましょうや」

今度は、さて、何であろう……。

「ここに一羽、ウミネコがおる。ズー——つとじゃ。ここは堀であるぞ。海ではないぞ。何ゆえじゃ」

うぐつ……。き・気づいておられたのか……。

「それなる鴟は、城下の者どもが『ジヨナサン』なる南蛮人の名で呼びおる由にて……」

「じよ・な・さ・ん……？」

「は。殿、あれをご覧くださりませ」

「ん？」

「夕刻になり、たった今、かがり火が焚かれましてござりまする。あれなる『ピアガ

ーデン』と申す酒場にて、城下の者どもが夜毎、酒盛りをしております。そこにこのジヨナサンが飛んでいきますと、客の誰彼なく面白がりてこれに餌を与えるのでござりまする」

直武どの、いやはや、さすがの情報通。まことに恐れ入る。

さてと。第二の楽しみはこれまで。

拙者の第一の楽しみ、ビアガーデンが開店の時刻とあいなり申した。

しからば、これにて、御免！

(四) 中土橋幻想

四日間続いた竿燈祭りが閉幕し、夜明けの街は夢から覚めかけていた。

東京へ帰る前に、高瀬はもう一度、故郷の街を歩いてみようと思いついた。

秋田駅前のホテルを出て、広小路へと歩を進める。雨上がりの濡れたアスファルトから、じんわりと湿った熱気がスニーカーの足元に伝わってくる。額に、背中に、たちまち汗が滲んできた。

もう少し歩くと千秋公園のお堀が見えてくる。水辺にさしかかれば気持ちだけでも涼しくなるに違いない。高瀬は急いだ。急ぐと、ますます汗ばんでくる。なんだか、急に滑稽に思えてきて、口元が緩んできた。

お堀が見えてきた。

古い記憶の中でゆらりゆらり揺れている竿燈は、お堀の水面に映って上下がさかさまだったりする。そうだ、昔の竿燈の会場は、広小路だったんだ……そう思い返すと、次々に昭和四十年前後の秋田駅前周辺の景色が甦ってくる。通り過ぎた背中の方には金座街、左手には、たしかマルサン、だったかな、ああ、秋田プラザ、セントラル・デパート、なんてのもあった……。

人影もまばらな早朝の広小路で、高瀬はふと不思議な感覚に陥る。

曇り空が、ふいにセピア色に染まってゆく。

向こうから、今は見ることはない、肌色に塗装されたボンネットバスが近づいてきた。フロントガラスの左側から三角のウィンカーをぴよこんと出して、久保田町のバス停に停まる。

広小路は一方通行。市営バスが逆行してくるなんて……。

すれ違いざまに、満員の乗客を乗せた市電のチンチン電車が通り過ぎる。木内前でぞろぞろと乗客を降ろすと、今度はぞろぞろと乗客を乗せ、また満員にして発車して去った。

ふいに目まいを覚えて、千秋公園入り口の中土橋で、高瀬は立ち止まった。

カラン・カラン・カラン、と聞き覚えのあるハンドベルの音がして振り向けば、アイスクリームを売り歩くおじさんが千秋公園の方へゆつくりとリヤカーを曳いていた。

万華鏡の中に迷い込んだように、目まぐるしく景色が交錯した。

「どうしたことだ……。何から何まで、今はもうないはずのものばかり……」

お堀の水面に戯れる手漕ぎのボートを眺めながら、柳の下にちよこんと座ると、いつの間にか、まん丸い、うっすらとした日陰に包まれている。見上げれば、母の差しているレースの日傘があった。

蝉しぐれの降り注ぐ遠い向こうから、流しの竿燈囃子が聞こえてきた。相の手に、小若のはしゃいだ声が弾んでいる。

ド・ド・ドンドンドン、そーれ！

ド・ド・ドンドンドン、よいしょ！

「ほら、コーちゃん、竿燈、来たよ」

母の指差す方を凝視する。

「ほら、コーちゃん、コーちゃん、お父さんいるよ。見える？」

昼竿燈見物に集まった人ごみの中では、父の姿を見ることは難しかった。

なんとなく機嫌を損ねて、高瀬は母のスカートを引っ張る。

「ちよつとやめなさいよ」

「もう帰る」

「何言ってるんの、しょうがない子ね」

「アイス買って」

「あとであとで。さ、始まるよ」

呼子笛の、ピーツという合図で、囃子の曲調が変わったかと思うと、目の前に立ち
はだかる大人たちの背中越しに、竿燈が立ち上がったのが見てとれた。

高瀬は父の姿を見たいと思った。

「ちよつとすいません、ごめんなさい」

人垣の、わずかな隙間を見つけた母は、高瀬の肩を手繰り寄せるように抱いてそこ
に立たせた。

父の姿があった。

竿燈の竿に素早く竹を継いだ父は、手の中で竹を滑らせるようにして額に差し、ぱつと両手を広げた。

突然、あたりの柳の枝を揺らした風が、中土橋の竿燈の群れに悪戯をする。

何本かの竿燈がバランスを失って倒れかかると、観客からは歓声とも悲鳴ともつかぬ声が上がった。

しかし、父の額の上にそびえる竿燈は、まるで路上に根を下ろした樹木のように、涼しげに立っていた。

拍手が沸き起こっていた。

高瀬はぼんやりと、父の足元を見つめていた。眩いばかりに純白の、足袋の爪先だった。

ふと振り返り、母の顔を見上げた。薄紅に染まった横顔の長い睫毛の一本一本がまっすぐに父の方を向いているように感じられて、幼い高瀬は嫉妬を覚えた。

昼竿燈の演技がひととおり終わった。

高瀬は無意識のうちに父の元へ駆け寄っていた。

「とうさん！」

「おお、浩介、来てだのが」

父は向日葵のように笑った。その分厚い掌で、高瀬の頭を撫でた。

いつしか、高瀬は父の背中で眠っていた。

父の濃紺の法被は、汗や煙草の匂いにまみれてはいたが、高瀬にとっては眠りを誘われる匂いであった。

帰り道。

夢うつつに、父と母の会話を聞いていた。

母の笑い声が好きだった。

睦まじい夫婦だった。

眠りから覚めた高瀬は、思わずあたりを見回した。

病院の長い廊下。長椅子に座っている。

見覚えのある若い看護師が目の前にいて、高瀬に話しかけた。

「お父さん、採血終わったから、いいよ。病室入って」

「あ、はい」

四人部屋の病室のいちばん奥、窓際が父のベッドだ。一枚のタオルケットを腰のあたりにかけて、父が横たわっていた。高瀬の姿に気が付いた。

「おお、浩介、来てだのが」

この言葉、いつかも聞いた気がした。

「夏休みは、いつまでだ？」

「二十三日」

「まあ、それまでにはたぶん、退院、できるべおん」

父のつぶやきは、父自身に言い聞かせているようだった。

窓の外から竿燈の囃子が聞こえた。近所の町内の竿燈会が練習を始めたのだ。たどたどしい太鼓の叩きぶりからすると、バチを振っているのは子どもだろう。

「浩介」

父が語りかけた。

「ん」

「おめは、竿燈、やらねなが」

「やらない」

思春期の会話はすぐに途切れた。

父がまた話しかけた。

「竿燈、明日からだべ」

「ん」

「おめに、頼みがある」

高瀬は、顔を上げた。

父は、枕元に置いてあったラジカセを指さした。

「これで、うちの町内の囃子、録音してきてくれ」

「いいよ」

「観客の歓声とかも、バッチリ入るようにだよ」

「うん。わかった」

翌日の夕方、学習塾の帰りに父の病室に寄る。

夕陽が差し込む窓辺のベッドで、父は眠っていた。眠っている父の体を切り刻むように、ブラインドが縞模様の影を落としていた。

高瀬は父を起こさぬように、ノートや参考書の入った鞆を父のベッドの下にそっと置き、枕元のラジカセの電源プラグをコンセントから抜いて、買ってきた電池を四本入れた。

ラジカセを抱えて病院の正面入り口を抜ける。高瀬は夕暮れの迫る竿燈大通りを目指した。

県庁・市役所前から山王十字路までの大通りは、出を待つ町内や企業の竿燈会の人々の熱気で溢れている。

高瀬は見慣れた町紋の提灯を探して歩いた。父の仲間や、高瀬自身の幼馴染たちの一団はすぐに見つかった。

「浩介くん！」

大きな声で高瀬を呼んだのは会長の杉さんだった。

「父さん、なんとした？ 退院は、まだ先だか？」

「もうすぐ退院できるだろうって、言っていました」

「んだが！ ああ、いがあったな。いがあった、いがあった」

「ご心配おかけして、すいません」

深々と頭を下げる高瀬の肩を、会長はポン・ポンと叩いた。

竿燈大通りへの入場を促す火花が上がった。

「浩介くん、そのラジカセは……?」

「父から、お囃子を録音して来いって、言われたんです」

会長は、自分が羽織っていた法被を脱いで、高瀬の肩にかけた。

「これを着て、一緒に、ついて来い」

「え……会長さんは……?」

「ああ、着替え用にもう一着あるから」

上半身裸になった会長が、本番への準備を進める仲間たちに向かって大声で叫んだ。

「いいかみんな！ 今夜は、タカのために、やるぞ！」

「おう！」

父の仲間たちが声を合わせて応えた。

会長の計らいで、高瀬は差し手たちの渾身の演技を間近に見ながら次第に熱気を増

してゆく囃子方の太鼓や笛の音をカセットテープに収めていった。

六十分のテープがいっぱいになった。

高瀬は、会長に法被を返し、丁寧に礼を言うと、観客で埋め尽くされた竿燈大通りを後にして病院へと急いだ。

人ごみに行く手を阻まれて、思うように前へ進めない。

病棟の入り口に着く頃には、汗びっしょりになっていた。

父の病室がある四階でエレベーターを降りた高瀬の目に、慌ただしく行き交う看護師や医師の姿が映った。

「おとうさん！ おとうさん！」

母の声が、廊下に響いている。

声のする方へ、高瀬は走った。走りながら、自分の顔から血の気が引いていくのはつきりとわかった。

夕方に立ち寄った四人部屋の向かいにある個室に父は移っていた。

ベッドに横たわる父にすがりつくようにして、母は声を上げて泣いた。

医師と、二人の看護師が一礼して病室から出て行った。

高瀬は膝から力が抜けて、がくと床に膝をついて呆然としていた。

我に返った高瀬は、父の枕元にラジカセを置いて、再生ボタンを押した。父が愛してやまなかった、町内の囃子が病室に低く流れた。

触れてみると、なんでもないように父の頬はまだ温かい。黙って囃子の音に聴き入っているようにも見える。

母と一緒に、声を上げて泣きたかった。しかし、なぜか声も涙も、ため息さえも出ては来ず、ただ父の傍らに立ち尽くして母の泣き声とラジカセから漏れてくる竿燈の囃子とを聴いていた。

広小路は、見慣れた一方通行で車が流れている。

ぼんやりと立ち止まっているのは、気づけば高瀬ただ一人で、中土橋付近の通行人

はジョギングやウォーキングや犬の散歩の人々から、いつしか通勤のサラリーマンやOLたちの姿に変わっていた。

高瀬は、何事もなかったように、ホテルに向かって広小路を引き返した。

作業服の青年が、お堀端に並んで立っている『竿燈まつり』の赤い幟の撤去作業を始めている。

通りに面したブティックの店員が、ショーウィンドーに張られた『竿燈まつり』のポスターを丁寧に剥がし始めた。

高瀬は、東京に移り住んで久しい年老いた母と、それから妻と娘とに、土産は何がいいかな……などと考えていた。

高瀬は、まったく気づいていない。

中土橋にたたずんでいた間じゅう、高瀬の傍に一人の男が立っていたことを。

高瀬より二十ちかくも若い、竿燈の装束に身を包んだ男だ。

「おお、浩介、来てだのが……」

男は、高瀬に話しかけていた。

だが、高瀬の耳には、その声が届いていなかった。

舗道を歩くスニーカーの足元に陽が差しってきて、高瀬は空を見上げた。

雲の切れ間から覗く青空は、驚くほど高く澄みわたっていた。

海が近いというわけでもないのに、頭上を一羽のカモメが弧を描くように飛んでいる。歩く速度を緩めて、しばらくカモメを目で追っていたのだが、夏の終わりを告げる空の色に融けるようにしてカモメの姿は消えた。

高瀬はもう立ち止まることはなかった。

「最優秀賞」受賞のことは

近きにありて

児 玉 ヒサト

文学賞と名のつくものは例外なくずっしりと重いものだと思っている。が、川柳作家として長いこと「軽み」を唯一の武器としてきた私は、軸足を小説に移して五年、いまだ軽く軽く書こうとする自分を変えられずにいる。今年創設された『ふるさと秋田文学賞』が、そんな私の分身を初代の受賞作に選んでくれたことは、だから、大きなサプライズだった。

この賞は今後、文学賞としての価値を磨き、才能豊かな書き手を育み、さらなる高みを目指すことになろう。その最初の受賞者たる私はといえば、まだまだ開発途上なのは誰の目にも明白で、すなわち、賞に恥じない努力を継続せよ、との叱咤激励を選

考委員の先生方から頂戴したのだと、痛切に自覚している。

受賞作『竿燈万華鏡』では竿燈まつりを軸に、様々な時代の秋田市の風景・様々な人物（生き物や幽霊なども）が万華鏡の模様のように交錯してゆく。思えば私の歴史も、逡巡や変遷を繰り返しながら竿燈の夜をゆらゆら回遊してきたといえる。むかし、父母に手を引かれ出かけた竿燈に、今は二人の孫の小さな手を引いてゆく。「ふるさとは遠きにありて思ふもの」というが、この近すぎるほどに揺るぎないふるさととは、まさに何物にも代えがたい。このたびの受賞にあたり皆様にお伝えしたい言葉は、生まれ育った秋田への、心からの「ありがとう」そのものである。

ふるさと秋田文学賞優秀作品

焼
畑
の
子

山
北

登・作

焼
畑
の
子



竹原雄介の一日は、朝起きてすぐに二階の窓を開け、ナナカマドの木を見上げることから始まる。先月の盂蘭盆から続く日課だ。

だいぶ前に植えられたものらしく十メートル近くにもなるこの木には、九月に入つてまもなく実がつき始めた。もうすぐ赤い実が鈴なりになることだろう。「七回竈に入れても燃えない」ところからこの名がついたように、秋田ではナナカマドを植えると火事にならないと言われ、古い屋敷ほどよく植えられている。祖母がこの家にナナカマドを植えた意味を、盆に聞かされるまで雄介は知らなかった。

朝の弱い雄介が、今朝は普段より二時間も早く起きている。顔を洗いに階段を下りると、薄暗い土間はひっそりと静まり返っていた。表戸から裏口まで、靴のまま通り抜けられる古い町家風の土間だ。表戸も裏の戸も昼間は開けっぱなしで、昔は近所の子供が勝手に通り抜けていたのだという。家が町家風の造りをしているのは、竹原の

家が五十年前、製材所ごと全焼した名残でもある。家を建て直す際、製材所と棟続きだった旧宅とほぼ同じ間取りにしたのだと祖母は言っていた。

茶の間のガラス戸を開けて中を覗き込むと、祖母の寝間を兼ねた隣の仏間では、屏風が跡形もなく取り片付けられて布団も見当たらなかった。暗い座敷の柱時計に目を凝らしてみると、針は五時二十五分を指している。祖母が何時に起きるのか雄介も正確には知らないが、夜がまだ明けるとか明けないかのうちに起き出しているのは間違いない。

裏口の戸は開け放たれていた。裏土間の洗面所で顔を洗ってから、雄介は裏へ出る。下屋続きの右手に大きな物置小屋があり、その二階は離れとなっていて妙子伯母と従姉の静香が寝起きしている。離れを兼ねた物置小屋と、左手に並ぶ納屋や漬物小屋との間の、土間の続きのような狭い通路を抜けた先に竹原家の屋敷畑が広がっていた。

畑は国道の裏手にまで続いている。市街地の真ん中にこれだけの畑が広がっているとは、ラーメン店や韓国料理店の並ぶ横丁からは想像できないだろう。国道へ出る

角には全国チェーンのファミリレストランも三年前にオープンした。それらの土地も、かつては竹原製材の敷地の一部であった。

畑の中には柿、桃、梨、李、栗、梅の木が散在している。梅や桃はすでに収穫されたが、これからは梨や柿、栗の季節だ。右手の奥にある栗の木はかなり大きい。それらの木々を囲むようにして、トマト畑、ナス畑、キュウリ畑、白菜畑、大豆畑、大根畑、ネギ畑、ジャガイモ畑等々が広がっている。少量ではあるが、カボチャや小豆、トウモロコシ、スイカも植えられている。竹原家の食卓にのる野菜や果物は、ほとんどこの畑で賄われていた。

大豆畑に人影が見える。青々と繁った葉と葉の間で、つばの広い日除け帽子が動いている。肘から先を覆う黒い腕カバー。暗色無地のもんぺ。おなじみのスタイルで祖母はしゃがみ込み、何やら作業をしている。

声をかけながら雄介が近づいていくと、祖母は手を休め、こちらを見上げながら細かい目を見開いた。

「あや雄介。珍しごと。こった早く起きて、どういう風の吹き回しだ？」

「なんも。早く目が覚めたから」

好奇の視線を避けるように、雄介は緑色の鞆を手に取り、実の付き具合でも見るふりをする。

「枝豆の収穫だ」祖母は作業に戻ってぶっきらぼうに言う。「きょうは十五夜だべ」

十五夜といえは一般に芋名月と呼ばれ、里芋を供えるのがもとの形と言われる。豆名月と呼ばれるのは十三夜の方だ。だが秋田では昔から十五夜を男の名月と呼び、餅を搗いて枝豆とともに供える地方が多い。供えた物は女が食べてはいけないとされる。今ではそんな風習を守る家もほとんどなくなったが、竹原家では祖母が祖母だけに、豆も餅も雄介一人は御下がりを食べさせられるのが常だ。

男は昔から短命と言われる家系で、今年喜寿を迎える祖母の竹原ハルがいまも一家の大黒柱だった。早く夫に死なれて以来、女手ひとつで四人の子らを育て上げ、この歳まで病氣らしい病氣をしたことがないと豪語するほどの女丈夫だ。

雄介は祖母の隣にしゃがみ込んだ。「婆ちゃん、手伝おうか？」

「なに、手伝ってもらうほどのこともねえ。きょう茹でる分はこれだけあれば十分だ」
畝にはまだ青々とした枝豆がずらりと植わっているが、祖母が刈ったのはほんの一部だ。

「ほかに何かない？ 種播きでも草取りでも、何でもやるよ。工場に行くまでの間だけど」

この申し出には祖母も手を止めた。

「さては何か良からぬ魂胆でもあるな。そうでもねば、オメが自分から畑仕事を手伝うなどと言い出すわけがねえ」

雄介はあわてて手を振った。

「なんも、魂胆なんてねえよ。たまには婆ちゃんに、楽させてやろうと思っただけだ」
祖母は十秒ほど雄介の顔を凝視していたが、やがて無造作に顎をしゃくり上げ、ぼそりと呟いた。「白菜の虫取りでもやってれ」

雄介は立ち上がり、梅の木の方へ向かう。数本の木を囲むようにして白菜畑が広がっている。種を播いてから日が浅いと見えて、本葉はまだ小さかった。尻ポケットに突っ込んでいた軍手をはめて葉を一枚一枚調べてみたが、幸い虫のついていない葉はないようだ。

高校時代までの雄介は畑仕事もよく手伝わされ、白菜の虫取りにはさんざん苦労した。農薬の類を一切使わないのが祖母の方針だけに、収穫前の白菜はちよつと油断すると虫食いだらけで食い物にならなくなる。離れに住む従姉の静香などは大の虫嫌いだから、白菜畑には近づこうともしない。まるで雄介の担当のようなことになっていた白菜の虫取りも、工場で働き始めてからというものの、ここ何年かは祖母にすっかり任せきりだった。

白菜に虫がついていないことを告げにいこうとすると、祖母はナス畑に移っていた。支柱の茎にぶら下がるナスの実を一個一個手に取り、熟れ具合を見ながら花鋏で切り取っている。この地方で漬物用に好まれる小ナスが笹につきつきと積み上げられ

ていく。

祖母の手際を眺めていると、後方から引きずるような足音が近づいてきた。振り向くまでもない。女にしては野太い妙子伯母の声を、雄介は背中から浴びせられた。

「ほう、きょうは雨でも降るんでねが婆ちゃん。雄介がこった早く起きて、畑さいるんだもんな」

この広い畑で、普段は祖母と妙子伯母の二人だけが野良仕事に精を出している。製材所が火事で焼けた半年後に祖父も三十八歳の若さで亡くなり、農家の出身だった祖母は実家の援助を受けて野菜作りを始めた。製材所跡地のうち、表通りに面した土地は家の新築と借金返済のため売りに出し、家を建てた残りの敷地をすべて畑とした。

祖母の実家は四町歩の田を持つ専業農家で、減反政策に伴う転作で昔から枝豆も栽培している。田植や稲刈りといった農繁期は、祖母も伯母とともに実家の農作業を手伝いに行く。手間賃代わりに十俵ほどの玄米を譲ってもらい、これで家族一年分の米を賄うのだ。

枝豆の収穫期には実家の作業小屋で祖母の甥が枝を脱穀機にかけ、祖母は出荷用の豆の選別を手伝う。その祖母の甥が入院したというので、雄介も高校時代の夏休みに連日三十度を超える猛暑の中、脱穀の手伝いをさせられた。脱穀機の轟音が響いて土埃のもうもうと立ちこめる小屋にこもり、ゴーグルと防塵マスクで顔を覆いながら、何時間も立ちっぱなしの作業だ。途中で夕立があり、屋外に野積みされていた枝豆の束が濡れてしまった。脱穀するたび枝豆に付着した土が泥となって飛び散り、前掛けをしても全身泥だらけになる。あの数日間ほど雄介が、農家の厳しさを思い知ったことはない。

妙子伯母は雄介が七歳の年に死んだ龍彦伯父の嫁で、祖母と同じく農家の娘だけに野良仕事も苦にしない。嫁姑の間柄でありながら二人がうまくいっているのは、祖母も伯母の仕事ぶりが気に入っているからだろう。

「婆ちゃん、おらはキュウリをもういでもべ。朝間のうちに仕込むべた」
「んだな。漬ナスもちょうどいい具合だ」

二人は雄介の存在など忘れたようにして、漬物のことを話し合っている。畑仕事も、漬物作りや台所仕事も、すべて女たちに任せっきりの雄介はただ食うだけの存在だ。祖母はナスの収穫を続け、伯母は隣のキュウリ畑で作業を始めた。雄介は祖母に折り入って相談したいことがあったのだが、こう伯母が近くにいるには切り出しにくい。伯母が起きてくる前の時刻を狙って、祖母が一人でいるうちに話を済ませようと思っていたのに、話しそびれているうち伯母が来てしまった。忙しそうに働く二人を尻目に、雄介はこっそり畑を立ち去るしかない。夜は工場からの帰りがたいい九時過ぎるので、家に帰ると祖母はもう寝てしまっている。また明日の朝も早起きをするのかと思ふと気が重くなった。

裏口から土間に上がり込み、台所に顔を出すと、母も起きて米を研いでいた。

「母さんはいつも夜遅いんだから、朝ぐらいもつとゆつくり寝ていたらどうだい」

「おらばっかしのんびり寝てもいられねえ。寝足りない分は昼寝するんだし」

「まったく、母さんは体が丈夫じゃねえんだから、あまり無理すんなよ」

「はいはい」

朝が早い代わりに夜は早々と寝てしまふ祖母や伯母と違い、野良仕事をしない母は掃除や洗濯、炊事まで受け持つ。そのうえ縫製工場の内職で毎日遅くまで夜なべ仕事に精を出している。いまは雄介も工場で稼ぎ、家に給料を入れているのだから、昔と違って母が無理をして内職をする必要もないと常々意見はしているが、耳を貸そうとしない。

母の貴子は生まれつき体が弱く、幼いころに肺炎で死にかけていたこともあるという。運良く成人しても結婚はできないだろうと祖母は思っていたらしいが、案に相違して中富家の御曹司に惚れられた。中富酒造と食料品卸の中富商店を経営する中富家は、町でも有数の富豪だ。玉の輿に乗り、中富家の嫁となった貴子だったが、その結婚生活は長続きしなかった。姑や小姑らに囲まれた生活は、母には辛い日々だったのだから。旧士族の由緒ある家柄だけに、いろいろとうるさい面もあったに違いない。雄介が数えて三つの年に、母は幼い一人息子を背負って中富家を飛び出し、実家に逃げ帰

った。以来二十余年間、母子はこの竹原家の厄介になっている。

母は五人分の朝飯の支度で忙しそうにしているが、雄介は早く起きたからと言って特にするともない。そうするうちには、離れから従姉の静香も起きてきて洗面所に立った。物置小屋を改築した離れの二階には二部屋があり、静香と姉の輝美が使っていた。輝美が七年前に結婚して家を出てからは、輝美の部屋に母親の妙子伯母が収まっている。

洗面所からの立ち去り際、静香はこつちを横目で見て独り言を呟いた。

「雄介がこんな時間起きてるなんてね。きょうは傘持ってかなきゃ」

母子で同じようなことを言う。一つ上で口の悪いこの従姉ともまた、雄介は子供の頃から折り合いが悪い。雄介が毎朝ぎりぎりまで起きてこないのは、そんな静香や伯母と顔を合わせたくないからでもある。たまに早起きしても階下に自分の居場所はないも同然と知り、雄介は二階へ立ち去った。

雄介の働く精密機械工場の音響部品課は、従業員六百人というこの誘致工場であつて、現在最も忙しい部署と言われていた。その音響部品課には二つの作業場がある。工作機械を扱う第一作業場は汚れ仕事の面もあるため、コンクリート打ちっぱなしの床に多数の大型機械が雑然と置かれ、金臭く埃っぽい空気が四六時中漂っている。隣りの第二作業場はリノリウムの床にずらりと机が並んで清潔感すら漂い、巻線や組立、検査などの工程を行っている。雄介が働いているのは、健康にいいとは言いがたい環境にある第一作業場の方だ。

円盤状の薄い人造砥石を研削盤グラインダーにセットし、これをゆっくり移動させながら高速回転させることによって、「コア」と呼ばれる微細な金属部品にコンマ何ミリという間隙ギャップを入れる。それが雄介の仕事だった。寸法が百分の一ミリ単位ですれても不良品となるほど、高い精度を求められる作業だ。

午後七時半過ぎのいま、雄介はこの日最後の「玉込め」を終えたところだった。この専用器具には、直径数ミリのコアが百個入る。これをセットする研削盤は、六台すべてが稼動中だ。一台一台に専用器具と砥石をしっかりと固定し、寸法も厳密に合わせ、おいて、機械のスイッチを入れる。研削テーブルが目に見えぬ速度で移動し、百個のコアすべてを切断し終えるまでおよそ一時間。だからと言って、ぼんやり待っている暇はない。次の一台が終わるまでに、専用器具への玉込めを完了しておかなければならない。終わったら即座に次のそれを研削盤にセットする。途中で少しでも時間が空けば、仕上がったコアの寸法がずれていないかどうか、備え付けの顕微鏡を覗き込んで自主チェックもしている。

雄介のところに回ってくる部品は、「017」という型番で呼ばれるものが大半であった。現在この部品は注文が殺到しているらしく、連日四千個とか五千個、多い日には六千個ものノルマを課せられる。六台の研削盤をフル稼働させても、四千以上のコアを切断するのに定時ではとても間に合わない。途中で砥石が割れたりする事故が

起きると、玉込めしたコアを台無しにするからそれだけ作業が遅れ、退社時刻も遅くなる。

昔のシングルレコードに似た薄い砥石は割れやすい。コスト節約のため使用済みの砥石も再利用するが、三度目になると割れる危険性が格段に高まるので、二度までとしている。研削テーブルの移動速度を早く設定すればそれだけ早く切断できる反面、今度は砥石の割れるリスクが高まる。かといって安全のため遅い設定にすると、これを五十回、六十回と繰り返すうちには時間がどんどん遅れ、一日のノルマを消化するのが難しくなる。そのへんの匙加減に熟練を要するのだった。

この日のノルマはそれでも比較的少ない四千五百で、砥石が割れるようなトラブルもなく、七時半には作業終了のめどがついていた。最後のコアを研削盤にセットすれば、あとは玉込めをする必要もない。次々と仕上がってくるコアを洗浄、乾燥して袋に入れ、機械の後片付けをするだけだった。

仕上がったコアのサンプルを念のため顕微鏡で覗いていると、入口のガラス戸が開

いて、工程管理者の葛西チーフが入ってきた。

「ご苦労さん。きょうはどうだ？ 順調？」

「はい。もうすぐ終わりつす」

「へば、早く帰れそうだな」

「おかげさまで」

「たまには一杯、と言いたいところだが、きょうはおれも野暮用があつてな。竹ちゃんも終わり次第、勝手に上がっちゃっていいよ」

「了解」

葛西チーフは四十歳で二児の父。駄洒落好きの陽気な性格だから、家に帰ってもいいパパなのだろうと雄介は想像している。気のいい葛西の表情を曇らせるような言葉を口にするのは心苦しいが、いつまでも黙っているわけにはいかなかった。

出口へ向かいかけたチーフを雄介は呼び止める。「葛西さん、ちよつと話があるんですけど」

雄介の表情を見て葛西は笑みを消し、真顔に戻った。

「なんだよ、改まっちゃって」

雄介は一瞬言い淀んだが、目をつぶってひと息に告げた。「じつは、おれ、近々転職しようと考えてるんです」

「えっ」

絶句している葛西を見てすかさず補足する。

「急な話でほんとうに申し訳ねえっすけど。おれ、中富酒造の方から誘われてるもので」

本来であれば、こういう話は課長に言うべきだったかもしれない。だが東京本社から派遣されてきたというあの課長の、いかにも東京者らしい気取ったような喋り方が雄介は苦手だった。その点葛西なら自分と同じ地元の人間だし、性格も気さくで話しやすい。この決意を一番に打ち明けるのは、足掛け六年にわたって世話になっている直属上司の葛西チーフと決めていた。

「ちょ、ちょっと待ってけれ竹ちゃん。考え直してけねか？　いま竹ちゃんに辞められたら、うちは大変だ」

長身の葛西は背中を丸め、大げさに頭を抱えてみせる。そんな恩人の姿を見ていると、雄介の決意もぐらついてしまいうさだ。

「じつはちょっと事情があつて……」チーフの動揺ぶりが予想以上だったものだから、雄介は喋るつもりでなかったことまで付け加える羽目になった。「中富酒造の経営者はおれの親戚っていうか……」

「ははあ、あの仙両のなあ」

葛西は感心したように雄介を見た。

秋田県の南部に位置する人口五万の湯沢市は、日本でも有数の豪雪地帯で上質の水に恵まれ、「東北の灘」と呼ばれるほど酒造りの盛んな町だ。全盛期には二十を超える造り酒屋が軒を連ねていたという。雪国の気候を生かした低温長期醸造法によるその酒はまるやかな味が特徴で、灘の「男酒」に対して秋田の「女酒」とも称される。

明治十一年創業の中富酒造は、市内でも三本の指に入る酒造メーカーだ。経営する中富家は武家屋敷の面影残る上町に邸宅を構え、藩政時代は佐竹南家重臣の家柄だった。得てして「士族の商法」は失敗しがちだが、中富家は数少ない成功例と言われる。その中富酒造の誇る主要銘柄が、清酒〈仙両〉であった。蔵元の正式名は中富酒造だが、酒好きの間では〈仙両〉の方が通りもいいため、「仙両酒造」などと誤って呼ぶ人もいる。

「そういう話なら、おれも無理に引き止めるわけにはいかねえな。竹ちゃんがあの中富さんの親戚だったとは知らねがったな」

親戚と称したのは雄介の方便だが、中富の名の権威にあっさり屈するあたりは葛西も湯沢の人間だった。

「家族にはまだ話してないんで、正式に決まったわけじゃないんですけど」

「辞めるとしたら、いつになりそうだ？」

「できれば、今月いっぱい」

「今月か」葛西は大きくため息をついた。

「課長にはおれの方から喋っておぐ。後任の手配もあるし。まあ、誰がやつても竹ちゃんレベルに達するまで時間かかるべのも」

「すみません、わがまま言って」

「いやいや、しょうがねえよ。竹ちゃんの人生だもんな。会社さ遠慮することはねえ」
葛西は雄介の肩を軽く叩いてから、工作機械室を出て行った。

次々と仕上がるコアを洗浄し、袋詰めしながら、雄介の心は早くも中富酒造での仕事に飛んでいた。以前テレビの映像で見た造り酒屋の仕事風景が目には浮かぶ。屋号入りの半纏を着た三人の蔵人たちが、大きな樽を囲み、櫂棒でモトを掻き回している。朗々たる調子で櫂入れ唄らしき酒屋唄を歌いながら、三人の動作が見事に揃い、三本の櫂がリズムカルに踊っていた。その場に漂う酵母の匂いまでが伝わってくるような映像詩だ。そんな伝統産業の現場で、自分はどうすぐ働くことになるのかもしれない。そう思うと雄介は、地に足がつかない心地がする。

実妹の中富志穂からこの話を持ちかけられて以降、酒造工場で働く自分を雄介は空想してきた。いまの仕事にやり甲斐を感じられなくなっていたのは事実だ。自分の作っているモノがどのように使われ、世の中でどういう役割を果たしているのか。それが今ひとつ実感として掴めない。毎日毎日延々と、同じ作業を繰り返す。そんな単調な日々には倦んでいかなかったと言えれば嘘になる。

三歳年下の志穂は、母が幼い雄介を連れて中富の家を出た後、父が後妻に産ませた子だった。血のつながった兄妹でありながら、兄は竹原の家で貧乏暮らしの苦汁を舐め、妹は裕福な中富家で恵まれた生活を送ってきた。

そんな二人にも、子供時代は一緒に遊んだ日々がある。雄介が小学一年生の夏、お城山の麓にある中央公園で遊んでいて、妹を名乗る志穂と初めて会ったのだ。当時まだ四歳だった志穂に手を引かれ、雄介は自分の生家でもある中富家へ遊びに行った。このことは祖母をはじめ、家の誰にも秘密にしていた。それからまたたびたび志穂の手引きでこっそり中富の家へ遊びに通っていたが、秘密は三年目に祖母の知るところと

なり、折檻のすえ中富家への出入りも禁じられてしまう。以来十数年間、妹とは口もきく機会もなかった。

その志穂と久しぶりで再会したのは、ひと月ほど前のことだ。大学を卒業し、今年帰郷したばかりだという妹が、あの夕暮れの道で待っていたのは偶然でもなさそうだった。竹原家の墓地は湯沢城址の麓にあり、墓参りへ行くには必ず中富邸の前を通らなければならぬ。毎年八月十三日のその時刻に雄介たちが通りかかると、志穂も知っていた可能性はある。大人になった妹と喋るのはどこか気恥ずかしかつたが、幼い日の面影は押ししの強いその一面にも名残をとどめていた。兄に会いたいと思いつづけていたらしい妹は別れ際、「これからときどき、会ってくれる？」と言った。それを断る理由もなく、祖母には黙ったまま、家の近くにあるファミリールレストランで二度会った。一週間前に会ったとき志穂は、「中富酒造で働いてみないか」という父親からの伝言を口にしたのだった。今の仕事に大きな不満を抱いていたわけでもないが、その申し出に気持ち揺れたのは、やはりどこか、機械部品工場の仕事に飽き

足りなさを感じていたからだろう。

誘致企業のライン製造ではなく、もっと地元に貢献するような仕事がしたい。できれば地場産業に就きたい。

志穂からの申し出は、自分でも知らずにいたそういう気持ちを気づかせてくれるのに十分だった。あとはどうやって祖母を説得するかが問題なのだ。

母の気持ちとしても、縁を切って久しい中富家に一人息子が再び関わることになるのだから、けっして穏やかではないだろう。おとなしい母が表立って反対するとは考えにくい。この話を受けることで母を裏切ることになるのだと思えば、良心の呵責を覚えなくてもない。だが何といっても最大の障壁は、異常なほど中富の家を憎む祖母の存在だった。

祖母の目が黒いうちは、自分は中富家の敷居を跨ぐことができない。雄介はそう諦めていた。竹原の人間にとって、祖母は絶対の存在だ。男が短命の家系を女が代々守りつづけてきた家、と言っても過言でない。普通なら男が担うべき大黒柱の責任を、

女の身で祖母は長年背負いつづけてきたのだ。そんな男勝りの祖母を前にすると、雄介は蛇に睨まれた蛙になる。

祖母がなぜ、これほどまでに中富家を憎むのか。雄介は今まで、詳しいことはほとんど知らなかった。というより、知ろうとしなかったのかもしれない。あの折檻の日以降、中富家に関わる話を極力避け、常に祖母の顔色を窺うようにして生きてきた。祖母の方でも雄介がそのことを言い出さない限り、自分から過去のことを話そうとはしなかった。

それが今年の盆、帰省した叔父と男どうしで語り合う機会を持ち、竹原家の過去にも話が及んだ。祖父や曾祖父の事故死について、叔父は叔父の知っている限りのことを話してくれた。それでもなお、祖母しか知らないことがある。ここまで知った以上は、後には引けない。雄介は覚悟を決め、祖母にも話を迫った。「きょうは特別に見せてやる」と言って仏壇の抽斗から取り出した過去帳を前に、ご先祖様の不幸を祖母は涙ながらに語ってくれた。事のついでに中富家とのいきさつも雄介は知った。母を

守りたい一心で、中富家を憎みぬくことを誓った祖母の決意も。

だが雄介には、祖母の言うほど中富の人々が悪人揃いのようにはとても思えない。数えて三つの年まで暮らした頃の記憶は遠く霧の彼方にぼやけているが、母と違って雄介自身は辛い仕打ちを受けたような記憶もない。志穂に誘われて何度も遊びに訪れた小学生時代の記憶となると、むしろ温かな思い出ばかりが残されている。そうした中富家の印象と、憎悪に満ちた祖母の語り口とが、雄介の中でどうしても結びつかないのだ。

祖母にしてみれば、権勢誇る素封家への反骨心もあったのだろう。竹原の家は中富と比べものにならないほど貧しい。経営していた製材所を五十年前の火事で失い、経営者だった祖父までがその半年後に早死にしている。火事の焼け跡を耕しながら女手ひとつで四人の子供たちを育てたのは、祖母がまだ二十代か三十代のころだった。

祖母は自家消費分のほかに余分の作物も育て、ナスやキュウリ、枝豆、トウモロコシなどをリヤカーに積んで、市内の得意先を売り歩いた。限られた行商先で得られる

現金はたかが知れている。その金で魚を買い、塩、砂糖、醤油といった調味料や日用雑貨、子供たちの文房具類などを揃えるのがせいぜいだったことだろう。祖母も七十を過ぎてからは行商に出なくなつたが、雄介が高校に通つていた頃までは毎年リヤカーを引いていた。

祖母が大の肉嫌いだった影響で、雄介は高校のころまで、好物の肉を家で滅多に食べたことがない。晩飯のおかずはいつも焼き魚と野菜だった。祖母はまた、農作業の合間に近くの山へ行き、山菜や茸を採ってくる。雄介は成長とともに少しずつ偏食を克服し、いまでは野菜や山菜、茸、魚の食べられる種類をだいぶ増やしたが、子供の頃はおかずを残して祖母によく叱られたものだった。食べ物を粗末にする者は、ろくな人間にならねえ。それが祖母の口癖だった。

祖母に人一倍厳しく育てられてきたのも、自分が竹原の家を継ぐべき唯一の男子だからこそと雄介は思わないでもない。母の離婚に際して、中富家は引き換え条件として雄介の親権を要求してきたという。母が頑としてこれを拒んだことは祖母に聞いた

話だが、実際には祖母自身の強い意志がそこに働いていたのではないかと雄介は思っている。中富家に対する祖母の根深い憎悪の根源は、そんなところにもありそうだった。

一方の中富家でも現在、雄介の父親と後妻との間に志穂以外の子がないという。志穂が婿を取るのではない限り、名門の家系も絶えかねない。中富の血を引く雄介は、双方の家にとって微妙な存在となっている。雄介自身は中富家の跡取りだとか、ましてや将来的な中富酒造の社長だとか、自分にそういう地位が務まるとはとても思えないが、世の中にその手の話はいくらでも転がっている。

そう考えると偶然に思えた志穂との再会も、何らかの思惑の影が見え隠れしないでもない。疑り深い祖母のことだから、話を打ち明ければ当然そのこともすぐに察するだろう。祖母を説得するのは容易なことではない。それどころか、ほとんど不可能のようにさえ思える。もしも雄介が中富酒造への転職話を受ける気なら、竹原の家と縁を切るくらいの覚悟が必要なのかもしれない。

貧しい思い出ばかりが多かったとは言え、長年暮らしてきた家には愛着もある。竹原の家を捨てる決心もつかなければ、中富家から持ち込まれた話を頭ごなしに断る勇氣もない。

雄介の胸にはここ何日か、そんな迷いが蟠っていた。その迷いを断ちきるために、言質を取る形でチーフに退職の意向を告げ、敢えて退路を断ったのだったが、それで果たしてよかったのだろうかとまだ迷いを捨てきれないでいる。祖母への談判を思うとますます気が重くなった。

3

仕事が多く終わったので、家へ帰った八時半過ぎには祖母もまだ起きていた。

「ほれ雄介。来てみれ。いい月だど」

仏間の開け放された障子の前に漆塗りのお膳が据えられ、皿に盛られた枝豆のほ

か、お供え餅、李や梨も載せられている。傍らに添えられたススキの穂も含め、お神酒とロウソク以外はすべて自家調達できるものばかりだ。窓も開けられており、微かな外気でロウソクの灯が揺れるのにつれて祖母の影も蠢いている。指差された窓の外を覗き込むと、澄んだ夜空に望月が小さく浮かんでいた。

「ついさっきまで妙子や静香も居て、月見してたところだ。まだ片付けねうちでえがった。オメも月見せい」

雄介はべつに月など見たいわけでもなかったが、ここは素直に従っておくことにした。祖母の機嫌がいいのを察して、例の話をするのに利用しようという肚もある。

「見終わったら、膳の上のものをぜんぶ食^けよ。女は食われねえからな」

などと言いながら祖母は呵々と笑う。この上機嫌は今朝、雄介が畑仕事を手伝ったときから続いているようだった。そんなときに中富の名を持ち出して、せっかくの御機嫌を損ねるのも忍びないように思えてくる。

茶の間に運んだ膳を前に座り、枝豆をつまみながら雄介はしばし思案した。隣の仏

間では、祖母が布団を敷き始めている。もう十分も経たないうちには寢床の前に屏風を広げてしまふだろう。話すなら今しかない。が、話しかけるタイミングがなかなか掴めない。

ぐずぐずしているうちに祖母が床を取り終えてしまった。また今度も言いそびれたかと思いきや、祖母は茶の間へ入ってきてきて横座に腰を下ろした。

「雄介、オメは今朝なにか、おらさ喋ることでもあつたんでねえが」

上機嫌だった表情から打って変わり、皺の内側に厳しさを折り畳んだようないつもの顔に戻っている。固くなりかけたお供え餅を飲み込んでおいて、雄介は腹をくくつた。

「婆ちゃん、おれはいまの仕事を辞めようと思ってるんだけど」

祖母の眼が一段と険しくなった。

「工場勤めが厭いやだぐなつたてが」

「そういうわけじゃねえけど、別の仕事をしようかと思つて」

「ほう。店も厭だ、工場も厭だで、つぎは百姓でもやるつもりだが」

雄介は高校を卒業したあと、いまの工場で働き始める前に、一年間ほど商店街のスーパーに勤めていた時期がある。客商売が性に合わないと言って、学校の斡旋で決めた地元の就職先をすぐに辞めてしまったことでは、祖母にさんざん説教されたものだった。

「いや、工場はやっぱり工場なんだけど……」

「まさか、また東京さ出て行ぐとでも言い出すのでねべな？」

高校三年のときも雄介は、東京へ就職したいと言って祖母に猛反対されている。

「まさか。市内だ」

「言ってみれ。どこの工場だ」

「酒造工場なんだけど」

祖母は目を細めた。「このバカタレが！」と一喝されるのを雄介は覚悟した。だが意に反して、祖母の声は静かだった。

「オメの親父がやってる工場だが？」

「うん」

「雄介。それがいったい、どういうことを意味するか、わがってるべな？」
抑えた声だけに、よけい凄味を感じる。

「もちろん、わかつてるよ」

祖母は雄介をじつと見据えた。猛禽類が獲物を狙うようなこの眼に、何度射すくめられてきたかわからない。いまは、大声で怒鳴られたほうがよほどすがすがしいと思つた。

蛇に睨まれた蛙は、釈明の言葉を必死で見つけようとする。

「なあ婆ちゃん。おれの立場にもなってくれよ。おれは確かに竹原の人間だけど、向こうの家とも血がつながっているんだ。こればかりはどうしようもねえ」

かつての祖母だったら、雄介にこうまで言わせないはずだった。二言も続けないうちに怒鳴られ、頭からねじ伏せられる。それが今は違つた。祖母の沈黙を不気味に感

じながらも、雄介の口は止まらない。

「母さんは向こうの家とすっぱり縁を切れればそれでいいんだらうけど、おれは違う。どこまでもついて回るんだ。婆ちゃんみたいにあの家を憎めたら、どんなに楽かわからねえ。それができねえから困ってるんだよ」

雄介がどれほど言い募っても、祖母の険しい表情は崩れず、そこに強固な意志を感じないわけにはいかなかった。野良仕事で灼けた顔には無数の皺が刻まれ、いかなる妥協も許さない、と言っているように見える。岩に向かって喋っているような気分になり、雄介は不意に虚しさを覚えて口を噤んだ。

「勝手にせい」

数秒の沈黙を破り、祖母はただ一言そう言い残して屏風の向こうに立ち去った。

罵倒されることを覚悟していた身には拍子抜けがするくらいの結末だったが、これで許されたと喜ぶのは甘い。祖母がそう簡単に許すはずのないことは、雄介も身に染みてよく知っている。

これからも当分は、苦手な早起きを毎日続けなければならないだろう。

そう思うとため息が出る。

それでも、頭ごなしに怒鳴りつけられるよりは脈があるのかもしれない。そうであれば祖母は、こう一喝していたはずだ。

「そつたに中富の家さ行きでがったら、この家がら出で行げ！　いますぐ、出て行げこの馬鹿け！」

この家は確かに祖母が建てた家だ。土地の登記人も祖母だし、雄介は祖母の家に住ませてもらっている身には違いない。雄介を叱る際、二言目には「出で行げ！」と怒鳴るのが祖母の常套手段だったが、家に給料を入れるようになってからはそれも影を潜めている。自分は祖母を言い負かしたのだろうか、と雄介は首を傾げた。

食べ終わった月見の膳を台所へ持っていくと、流しの前に母が佇んでいた。洗い物をしていてもなく、ただぼんやりと立っている、という風だった。

「母さんも、いまの話、聞いてたんだな」

母は顔を伏せたまま頷いた。

今回の話を打診されてからというものの、雄介は祖母にばかりでなく、母にもこの話を伏せていた。母にとって、青天の霹靂とはこのことだろう。エプロンの裾を握る手が、微かに震えているようにも見える。

「母さんがあの家で、いろいろ苦労したことは婆ちゃんに聞いたよ。おれはまだ小さかったから覚えちゃいけないけどね。母さんにしてみれば、二度と関わりたくない家なんだろ？」

「昔の話だどもなあ」

母はやっとその一言を絞り出した。

「でも、昔のことは水に流して、というわけにもいかないんだろ？ おれにはそういう蟠りなんてないから、酒造工場で働かないかと言われたら、やっぱり考えちゃうんだよ」

「もう決めたんだべ？」

「じつは、まだ迷ってる。ああは言ったけど、母さんや婆ちゃんの気持ちを見殺しにしてまで、どこまでも自分の思い通りにするのはやっぱり気が引けるんだ。できれば円満に解決したいんだけど」

母は雄介の差し出した膳を受け取り、枝豆の殻を捨てて皿を洗い出した。蛇口から出る水音が、母の心境を表しているように思えた。

「やっぱり、円満なんて無理だろうな。母さんだって、面白くねえだろうし」
「婆ちゃんは、雄介を中富の家に取りられるんじゃないかと心配してるんだべ」

皿洗いの手は止めずに、母がぼそりと呟くように言った。たいして汚れてもいない皿を、亀の子たわしで何度も何度も、無意味なくらいにこすっている。まるで水音を消すのを恐れてでもいるかのように。

「お盆のとき婆ちゃんに聞いたよ。母さんは中富の家を出るとき、涎たらして寝てたおれをおんぶしながら、夜中にこっそり抜け出して、この家の戸を叩いたんだってな。石に齧りついてでもこの子は、おらが育てると言い張って、母さんは頑張ったん

だつてな」

「んだよ。あのときおらがそうしてねば、雄介は今ごろ金持ちの家で、何不自由なく暮らしてだべな。大学も出してもらえたべし、仕事だつて工場稼ぎでなく、もっと上等な仕事にありつけたべな。さぞかし恨んでるべ。こんな貧乏な家さ無理やり連れてきて」

「そんな言い方すんなよ。おれは母さんを、恨んでなんかいいねえ。誰も恨んでねえよ。でもな、なんだかやりきれねえんだ。親たちの仲が悪いせいで、おれと志穂も、長いあいだ顔を合わせることもさえできなかったんだから。つい最近、久しぶりで喋ったけど」

母は蛇口をひねって水を止めた。それまで伏せていた顔も上げ、雄介に向き直る。

「今度の話も、その志穂ちゃんから言われたんだべ。どうも近頃、様子が変だと思つたら」

「黙っていたのは悪かったよ。でもな、とても話せるムードじゃねえだろ？ この家

には昔から、絶対に触れてはならないことがあったんだ。中富のことを喋れば、婆ちゃんに睨まれる。この家に暮らしてる限り、婆ちゃんには逆らえねえ。でもなあ、おれだってもう二十五だ。いつまでも子供じゃねえんだよ。自分の意志で物事を決める自由ぐらい、そろそろ与えられてもいいんじゃないか？」

母は膳を洗い始め、水音の膜を張る。耳を澄ますと、その水音に独り言のような言葉が混じっているのも聞き分けられた。

「そりゃ雄介には感謝してると。雄介が給料入れてけるようになってから、暮らしはずいぶん楽になったもんなあ。静香ちゃんはその調子で、服だけ化粧品だ、バッグだとか言ってる、雀の涙しか入れないみたいだし。だから雄介は、おらたちさ気兼ねするとはねえんだ。雄介の好きなようにやったらいい。仕事を変えたかったら、変えればいい。今まで通り給料さえ入れてければ、おらはなんも言わねえ。婆ちゃんだって、許してけるべ。婆ちゃんもそろそろ、年だもんなあ」

そんなことをぶつぶつ呟きながら洗い物を続ける母を残し、雄介は二階に立ち去っ

た。

「勝手にせい」と言い捨てた祖母も、「雄介の好きなようにやったらいい」と呟く母も、雄介の転職をしぶしぶ認めてくれたように思える。だが雄介は気分が晴れなかった。ないものねだりかもしれないが、二人の納得づくですっきりと転職を決めたかったのだ。

4

早起きもちょうど一週間目となる日曜の朝、雄介は眠いのを我慢して五時に寢床を抜け出した。休日ぐらいゆっくり寝ていたいという怠け心に鞭を打ち、土間に降りて洗面所へ向かう。冷水で顔を洗うと、少しは身が引き締まるように感じられた。

物置と納屋との間の薄暗い通路を抜けて畑に出る。祖母はナス畑にいた。

「大根畑の草取り」

こちらからお伺いを立てるまでもなく、雄介がそこに立っただけで祖母はひと言その命じた。祖母はナスの実をつぎつぎと花鋏で切り取り、プラスチックの箱に入れていく。作業の手は休めず、一度も顔を上げなかった。

大根畑の在り処はすぐにわかる。ナス畑から少し奥のほう、柿の木の手前に畝が立ててあり、ギザギザの葉がだいぶ育ってきている。畝のまわりにはところどころ雑草も生えている。雑草と間違えて大根の葉を抜くような初心者ではない。雄介はそこにしゃがみ込み、草取りを始めた。

子供のころから畑仕事はよく手伝わされたから、祖母のやり方は雄介もよく知っている。雑草を根ごと引き抜くのは言うまでもない。抜いた草すら祖母は無駄にしなかった。雑草を集めておいて後で畑に埋め、土の中で発酵させて堆肥とする。大根畑から抜いた草も、後で堆肥にしやすいようにと、一箇所にとめて積んでおく。三十分も作業をするうちには草の小山ができあがった。

野菜作りに肥料は欠かせないが、祖母は金を出して肥料を買うような真似をしな

い。すべて自家肥料を利用する。物置小屋を離れとして改築する以前は隣に鳥小屋もあって、鶏を何羽も飼っていたのだという。当時としてはまだ貴重だった卵を得るほか、肥料の鶏糞も自家調達できるので一石二鳥だった。

この畑を作った当初は、火事の焼け跡に残された材木の灰すら捨てずに肥料として活用し、土に鋤き込んでいたのだという。スタートはまるで焼畑農業だったが、実家に捨てるほどある米糠や、雑草を利用した堆肥も加えることで、祖母は五十年のあいだ畑を維持してきた。この畑の上質な土は、祖母がそうやって丹念に土作りを続けてきた成果なのだ。

朝晩はめつきり涼しくなってきたこのごろだが、六時も過ぎるとお城山の上から朝日が射し始め、雄介はうっすらと汗ばんできた。

今朝はどうしたものか、伯母がまだ畑に出てこない。普段ならとつくに起きている頃だ。

六時半近くなつて伯母がようやく畑に姿を現したが、歩き方が大儀そうだ。祖母と

伯母が何事か話し合っているのを遠目にちらちら窺いながら、雄介は草取りを続けた。

やがて祖母が大根畑まで歩いてきた。

「雄介、草取りは大体できたか？」

「ああ」

「妙子が腰痛こしいでどて、きょうは畑仕事も休むことにした。雄介、朝飯までもうひと働きしてけれ。豆の刈り取りを頼む」

畑仕事は腰を屈めることの多い重労働だけに、伯母は「腰が痛い腰が痛い」と、年中こぼしている。それでも仕事を休まなければならぬというのは、よほど悪いのだろう。心なしか伯母は、顔色も良くないようだ。

祖母は伯母より年を食っているし、腰もだいぶ曲がっているのだから痛くないはずはないが、日頃から泣き言は口にしない。

「昔やったことあるべ雄介。たいして難しぐねえ。おらはきょう、久しぶりで野菜売

りさ行ぐごどにした。それまでに漬けナスと枝豆を用意しておかねばならねえんだ」
「婆ちゃんこそ大丈夫かい？ 今どきリヤカーに野菜積んで、根小屋町とか大工町とか、あっちの方まで売りに行くんだろ？」

「年も年だから、あんまり遠くさは行かねえ。今年はナスも豆も豊作だもんでな。家で食うにはだいぶ余るんだ。お得意さんになんぼでも買ってもらって、金さ換えるべ」
「悪りのも、雄介にはがんばってもらわねどな」伯母も珍しく済まなそうな顔をしている。

「よし、枝豆刈りは任せておいてくれ。野菜売りにはおれも行く。婆ちゃんひとりじや大変だろ。久しぶりにリヤカー押してやるよ」

雄介の勇ましい言葉を聞いて、伯母も安心したように腰をさすりさすり、覚束ない足取りで家へと引き返していった。

「へば雄介、刈るのはこっちの豆だ。ここから先は大豆にするから、刈ったら駄目だど。わがったが？」

「うん」

祖母から鎌を受け取り、雄介は作業に取りかかった。祖母はナス畑に戻っていく。今年もナスも枝豆も豊作で自家消費分には多すぎる、それで売りに行くのだと祖母は言ったが、じつは最初から余分に作付したのではないかと雄介は思う。思い出すのは、今年の春頃に祖母が話していたことだ。かつて売り歩いた得意先の人と道で偶然行き会い、「あんたの持つてくる野菜はいつも新鮮で、旨^{うめ}がったなあ」などと祖母は言われたらしい。他の得意先でもそういう声が多いことを知り、祖母の心が動いたのかもしれない。七十七歳になって重いリヤカーを引き、街中を売り歩くのは大変な重労働だろう。それでも祖母は、お客さんの喜ぶ顔がもう一度見たいと思ったに違いなかった。

雄介も高校時代までは枝豆やナスやキュウリ、トウモロコシの収穫を手伝い、祖母の行商を支えていた時期がある。ナスずしや梅漬、大根のいぶりガッコなど祖母手製の漬物、干柿、自家製大豆を煮て作る味噌も人気商品だ。夏野菜の季節が過ぎたあと

は、土ゴボウに土ネギ、外干大根、白菜、芭蕉菜、長芋といった越冬野菜をリヤカーに積んで、十一月頃に売り歩く。越冬野菜を積んだ荷はとりわけ重く、雄介もたびたびリヤカー押しを手伝わされた。高校時代にそんな姿を同級生に見られ、笑いものにされて以来、雄介は祖母の手伝いを嫌うようになったのだ。祖母が行商をやめてしまったのは、それから間もなくだった。

就職して給料を家に入れるようになったのを理由として、高校を卒業してからは畑仕事も手伝わなくなった。野菜なんて、金さえ出せばスーパーでいくらでも安く買える。腰が曲がるほど苦勞をして野菜を作っても、なんの意味があるのか。そう思ってきた。

孫のそんな変化を、祖母はどう思っていたのだろうか。祖母は祖母で、頑なに野菜作りを続けることで雄介に何かを教えようとしていたのかもしれない。給料を家に入れているという強みが効いて、祖母も雄介には表立って何を言うということもないが、食事のときなど、雄介に向けられる物言いたげな視線に、どことなく陰が感じられな

いではなかった。それは特に雄介が仕事休みの日、近くの山へ日帰り登山に行ったり、オフロード用の自転車で遠乗りをしたりして、日が暮れるような頃に帰ってきた後の夕食時に顕著であった。そんな祖母の目を避けるようにしながら、慌しく食事を済ませて二階へ立ち去るのは気持ちのいいことではない。

それらの日々を経て、今また雄介は畑に立っている。どん臭い長靴を履いた両足で畑の土に踏ん張り、祖母や伯母のように腰をくの字に折り曲げながら、鎌をふるって枝豆を刈り取っている。祖母たちが丹精を込めて育てた見事な豆だ。十五夜に食べた豆の、得も言われぬ香気が口のなかに甦ってくる。祖母の作る豆のファンが市内に何人もいるというのは、頷ける話だと思う。あれはスーパで売られている豆では到底味わえない香りだった。

工場の仕事さえなければ、毎日リヤカーを押して、祖母の行商手伝いをしてもいい、とさえ雄介は思う。誰に笑われたって構いやしない。雄介がこうして豆を刈り、祖母を手伝うのは、それで酒造工場への転職を認めてもらおう、などという下心からでは

ない。最初は確かにそうだったが今は違う。この一週間、土の匂いを嗅ぎ、畑の作物に頬を撫でられるようにしているうちに思い出したのだ。幼い頃から慣れ親しんできた祖母の畑。収穫の喜び。どんな苦労があっても、作物が無事に実り、こうして収穫できれば吹き飛んでしまう。その作物がお客さんの笑顔に迎えられるなら、なおさらだ。

酒造工場へ転職しようという雄介の決意は動かないが、自分はどこまでも、竹原の人間だ、とも思う。祖母の孫であり、母の一人息子であり、この畑で養い育てられた大地の子だと強く思う。

大地に根を張って生きる人間でありたい。

雄介はそんなことを考えながら、鎌で枝豆をつぎつぎと刈り、収穫物の山を築いていった。少し離れたナス畑では、祖母が花鋏を器用に使ってナスの収穫をしているのが見える。祖母と競争をするようにして、雄介は作業に没頭した。

「雄介、そのへんでいいべ。そろそろ朝飯だ」

祖母の声に顔を上げると、その背後から朝日が照りつけ、年老いた農婦に後光が射しているように見えた。

「もう少し。これ全部やつつけてしまおうよ」

祖母に指示された畝は、刈り残した枝豆もあとわずかだった。

「刈ったらまとめて小屋さ持ってきてくれ。朝飯食ったら、みんなして豆のもぎ方だ」
祖母はそう言い残し、ナスの入った箱を猫車に積んで立ち去った。

耳を澄ますと車の行き来する音も国道の方から微かに聞こえてくるが、店や家々に
囲まれたこの畑だけはまるで別世界だ。大地の香りがここにある。

不意に雄介は、五十年前の焼畑の残り香を嗅いだような気がした。祖母が土に鋤き
込んだ灰は、畑の一部として今も残されているのかもしれない。

雄介は畑に屈み込み、残り数株の枝豆を刈りにかかった。

焼畑の子

「優秀賞」受賞者のことば

秋田は題材の宝庫

山北 登

このたびは栄えある第一回受賞者の一人に選んでいただき、ありがとうございます。ふるさと秋田文学賞が創設されることを新聞の記事で見かけたとき、これは是非とも応募しなければならぬと決意しました。この機会に地元秋田の歴史や民俗、産業等について学び直し、秋田の豊かさというものを再認識できたことが最大の収穫です。

秋田をめぐる状況は、決して樂觀できるものではありません。つつい下を向きがちになる今の時代にあって、秋田をテーマとする新たな文学賞がスタートしたことは、秋田県人の一人として喝采を送りたくなります。ふるさと秋田文学賞が今後も毎

年恒例となって実施されるならば、さまざまな角度から新しい秋田の姿が発見されるに違いありません。

秋田は他県にも引けを取らない題材の宝庫です。書かれていない題材もまだまだたくさんあります。私自身、書きたいことがありすぎて困るほどでした。あれもこれもと欲張りすぎた結果、五十枚という規定に収まりきれないほど構想が膨らんでしまい、自分で作品が制御できなくなった反省も残ります。講評の場で選考委員の先生方にご指摘いただいたことを肝に銘じ、今後も秋田を題材とした小説に取り組んでいこうと思っております。

選
評



「秋田」は面白いテーマ

内館 牧子

第一回目の選考は非常に難しいものです。それによってそのコンクールのレベルが決まってしまうところがあるからです。

第一回ふるさと秋田文学賞には全国から百二十二編の応募がありました。どれも大変面白く、「秋田」を色々な角度から原稿用紙にのせていて、秋田を描くというテーマはよかったと改めて思われました。

最終選考に残った八編を選考会でじっくり議論しましたが、どの作品にもいいところがあるものの、果たして最優秀賞に値するか否か。それは選考委員全員が感じていました。

面白いことに、各選考委員が高得点をつけたものはバラバラで、それだけに議論は熱をおびました。

例えば、西木委員は『焼畑の子』に高い点をつけ、塩野委員は特に高い点はどれにもつけていません。私は『まほうべん』と『竿燈万華鏡』に高い点をつけています。とはいえ、「最優秀の一編にして五十万円の賞金」にふさわしいかとなりますと今ひとつで、いっそ最優秀はナシでいいのではという声も出しました。

最終選考作品に共通する欠点は、短編五十枚に多くを盛り込みすぎることが一つ。わずか五十枚ですのに総花的で、結局何の話なのか焦点がぼけているのです。

もう一つは、小説の体をなしていないものが幾つか見うけられたことです。長いエッセーというか長いあらすじというか、自分史というか小説になっていないのです。

結局、最後に争ったのは、『イオの月』『竿燈万華鏡』『焼畑の子』でした。

『イオの月』は三人とも決していい点はつけなかったのですが、ハタハタの視線で

書いた文が捨てがたい面白さで、「こわいもの知らずでよく書いた」という声があがりました。特別賞をあげたいという声も出たほどです。

『竿燈万華鏡』はなぜ連作にしたのか。とても惜しかったと思います。おそらく、おそらくですが、一本の作品として書き上げることが苦しかったのではないかと、うのが選考委員の共通した意見でした。小説は自分を追い込んで構築し、書いていかねばならず、楽ではありません。淡いスケッチのような四編にすると楽なところがあります。一本にしていたら、文句なしだったでしょう。

『焼畑の子』は淡々とした心理描写と情景描写に格調があり、今後も書き続けていける力を感じました。選考委員で話し合いながら読み直し、優秀賞をさしあげるに足るという一致を見ました。

多くの方に第二回にご応募頂きたいと願っております。

秋田は、そして秋田人は、原稿用紙を無尽に走る面白さを持っていると改めて感じています。



小説創作の筋力を

塩野 米松

大工さんが一日中鋸を挽いたり、鑿を使っても疲れずに作業が出来るのは、ながい修業をして大工の体を作り上げているからです。菓子職人が思い描いた季節の菓子を形に出来るのはそれなりの努力を積み重ねてきたからです。技や勘は体に属するものです。小説やエッセイなども、思ったもの、考えたものを表現するためには文章力という筋肉が要ります。

今回の第一回ふるさと秋田文学賞に百二十二本の応募がありました。秋田県を舞台にするか、秋田に関わりのある五十枚以内という制限の中で、なるほどこういうふうなテーマを設定するか、こういう人物を故郷と結びつけるのかという感心させられる

ことは多々ありましたが、残念ながらその文章の筋力がほとんどの作品に足りませんでした。せっかくの題材が描ききれないので。もったいないと思いました。そうしたことから、私は今回は最優秀賞はないかなと思いましたが、選考委員会ではこれからの努力を期待してということで、発表の二作品を各賞に選びました。

この二作品に関して、私の感想を述べます。

優秀賞の『焼畑の子』は、湯沢市が舞台。造り酒屋、誘致工場、農家の仕事、跡取りの問題と、現代の地方が抱える話題が豊富に設定されています。祖母、母、主人公の青年と一緒に暮らす家で、青年は誘致工場に勤務。彼に造り酒屋で働かないかと声がかかります。実はその醸造所の主人は青年の実父。母が離縁した相手なのです。しかし、すでに後妻がおり、主人公と腹違いの妹がいます。酒蔵への転職を持ち掛けたのはこの妹。他に主人公の家には伯母と従姉妹が二人います。これだけの設定を準備するだけでも物語は複雑さを運び、なにやら事件が始まりそうですが、五十枚に納めるのはとても無理です。

五百枚からの作品のための設定です。三十坪の土地にビルは建たないものです。長編の序章が今回の応募作品と読みました。秋田を舞台に予感を含んだ物語として推薦しました。

最優秀賞の『竿燈万華鏡』は四十三枚のなかに四作品が収められたオムニバス。「缶ピース伝説」が十三枚、「イチゴ味の雨」が八枚、「拙者はウミネコ」が七枚。「中土橋幻想」が十五枚。いずれも竿燈祭りを舞台に語り手が登場して物語を話すという設定です。

一話目は明治十九年の「俵屋火事」直後の焼け野原の闇に竿燈が再現されてくる話です。読みながらお囃子が聞こえ、光景の浮かぶ作品です。題材の選択、目の付けどころ、展開、見事です。この作品はきちんと描き込めば素晴らしい作品になります。十三枚に押し込んでしまうのはあまりにもつたいない。それも、竿燈の準備をする現代の若者が、この話を教えてくれた缶ピース好きの町内の長老を偲びながら、長老の語り口で話すという構成なのですが、このおじいさんも実はその先輩から聞いた話と

いう複雑な構造。これは他の三作品も同じです。聞いた話の連作というひねりでしょうが、物語は作者が語るものです。作者が責任を持って物語を語ることで、作品に潔さと切れが出ます。ものを書くときの覚悟が作者を育てます。

次回もたくさんの応募があることを期待しています。文章の筋力を付けていい作品を書いてください。



小説は短いほど難しい

西木 正明

今回最終候補に残った作品を読ませていただいて、まず思ったことは、程度の差こそあれ、いずれも「短編の罨」にはまったな、ということでした。「短編の罨」などといえば、なにやらないようなことのように聞こえるかも知れないが、要は短編小説の持つ難しさを克服出来ていない、ということなのです。限られた枚数の中で、なにを残し、なにを捨てるか。数百枚の長編でもいえることですが、短編の場合、それがよりシビアになります。

書くべきことの取捨選択がちゃんと出来ない、やたら説明が多くなって読みにくくなり、内容に感情移入出来なくなってしまう。

最優秀作となった児玉ヒサトさんの『竿燈万華鏡』は、四十三枚という短編を、さらに掌編ともいえる四編の連作仕立てにして、結果的にほかの作品に比べて読みやすくなっています。しかしその分、作者が本当に書きたかったことがぼやけて、わかりにくくなりました。

最初の「缶ピース伝説」だけに的を絞り、元々の竿燈がどんなものであったかを、大火のエピソードなど時代の息吹をからめて丁寧に書けば、登場人物も行間から活きと立ち上がり、すばらしい短編小説になったはずです。

そういうもったいなさはありますが、こうした題材に目をつけただけでもたいしたものだという評価もあって、授賞に至りました。

山北登さんの『焼畑の子』は、ある意味で『竿燈万華鏡』とは対照的な作品です。主人公の若者のたたずまいがわかりやすく、彼の存在が現代の秋田の今を表現していて、重量感のある作品になりました。全体の構成も良く、小説を読む楽しさを味わうことが出来ました。

惜しむらくは、テーマが長編向きともいえる重厚なもので、五十枚という枚数に閉じ込めるには、そうとうのテクニクが必要だということです。

繰り返しになりますが、小説は短編ほど難しい。全体の構成も文章も絞り込みが結果を左右する。今回読ませていただいた作品を通じて、あらためてそのことを痛感しました。

ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 平成二十七年一月二十日

発行 秋田県

編集 秋田県企画振興部総合政策課

電話〇一八（八六二）五二〇〇